

(春期福音特別集会(京都))

無の原点

——マタイ伝第5章3節——

1995年6月3日

小池辰雄

福音は無の世界 神交 霊現 敬天愛人 活ける文字 どん底を歩いた人 (詩) 「視よこの人ぞ！」 祈り

【マタイ5】

3 幸福さいわいなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

●福音は無の世界

今日は『無の原点』と題しました。欧米の世界は「有」の世界です。彼らは「無」を知らない。インドを始めとして東洋——中国の老子、日本の禅宗——これは無の世界です。福音は無の世界なんです。イエスというひとは父なる神一切であって、

「我を見し者は父を見しなり」といつて、

「私の中には父なる神が充滿している。私を見た者は神さまを見たのだ」

と、ヨハネ伝に書いてある。我々は、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、こう言えなければダメなんです。

「**霊の貧しい者は恵福さいわいである**」

という。「さいわい」というのは幸せではない。あれは

「恵まれたるかな、恵福なるかな」

ということ。恵の字をぬかした幸いなんてものはダメです。

「自分を何者ともしない」

ということが

「**霊の貧しい**」

ということ。「プネウマ」という字は心ではなくて、「霊」という字です。我々は霊が貧しくなければ、「霊的だ」なんて言ったってダメです。キリストの霊を拝借しているだけの人はなし。自分が何も無い。無者なんだ。私は『無者キリスト』(著作集第一巻)ということと言いましたし、『無の神学』(著作集第三巻)なんていうのを書きましたが、そういう意味でまさに無



の原点はキリストなんです。キリストは神一切で自分が無い。だから、キリストは
「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。また、

「我なにごとをも為しあたわず」

と言っている。

「私は何もできない。父なる神の力がきて、やらされているだけのはなしだ」

と。これがイエス・キリストなんです。我々の福音はまさにこの無をいただいている。

「賜りたる無」

です。自分で悟って無になつたのではない。

「お前は何ものでもないぞ、私がお前の中にいるんだ」

と。キリストは自分が何ものでもない。父なる神だけです。そういう無の世界です。これは虚無ではない。

「我が無い」

無我なんです。我の無い世界です。

それは本当の宇宙的な我がそこで生きる。キリストは宇宙人ですから、こんなありがたいことはない。非常に雄大です。

「雄大無辺で、過去も現在も未来も全部永遠の現在で生きている」

ような人間なんです。ありがたくて、もう何とも説明できない。この福音の世界はそういうもの凄い世界です。イエス・キリストというのは宇宙人だから、

「アブラハムよりも先に我は在りしなり」

という。これはもう、本当に大変なひとですよ。私は、

「キリストはどういうひとか？」

と言うと、

「大変なひとだ」

と言う。これは大変な方です。神を現象している現象体です。神さまの現象体がキリストです。

「神はどこにいるか？」

「イエス・キリストに在りて在る。キリストを見ろ」

と。キリストを見て、神がわからない者はいつまでたつても神がわからない。神は見えない。望遠鏡で見たつてダメだ。本当の霊の世界はそういうわけです。

● 神交

キリストを本当にいただいていると、霊的傲慢でなくなる。霊的傲慢はサタンだ、サタンは霊的傲慢の張本人だから。



「俺は靈的になった」

なんて思うと、サタンの手下になつてしまふ。

「私は何もありません、信仰もありません」

と言う。信仰を私したらダメなんだ。もし、「しんこう」と言うなら、「神交」です。神と交わっている世界。キリストは神と交わっているひとだった。私の「しんこう」は信じ仰ぐのではない、神との交わり（神交）です。キリストにあつて神との交わりの人間です。全部、上から来ている。

「求めよ、さらば与えられん」

という。

「私は今、与えようとしているから、求めなさい」

という前提があるんですよ。

「お前が求めるから、それでは与えてやろう」

というのではない。もう、キリストの方から与えようとしている。完全に無条件の恵みの世界です。神自身を、キリスト自身を与えてくださるのが、この「恵み」というものです。「賜物」というのはそこから出てくる。恵みはキリスト自身です。キリストが恵みの主体です。そこからのいろいろな賜物が出てくる。賜物を求めたら、ダメですよ、それは部分的なものですから。まず、キリストをただただかなければ。

「私がやろうとしているから、私自身をやろうとしているから、求めなさい」

と。その

「私自身をやろうとしている」

という前提を忘れてはいかん。

「お前の求めが熱心だから、やるよ。まだ熱心が足りないから、やらないよ」

と、そんなことではない。「人間の側の熱心」なんていうものは当てにならない。

「神の熱心がこれを為す」（イザヤ9・7）

と旧約のイザヤ書にもある。「神の熱心」がする。キリストの熱心がする。私たちは完全に受け身です。そうすると、その受け身の世界にももの凄い力がきて、ありがたくてしようがない、力が来てしようがない。

私は、自分で言つたらおかしいけれども、ほとんど疲れを知らん。集会が終わって、

「お疲れさま」

なんて、何言っているかと言いたい。上から力が来て、終りになるほどだんだん力が来ているのに、何が「お疲れさま」かと。日曜日の集会には、終りにいくほど力が来てしまつて、それから六日間の原動力が日曜日にくる。日曜は安息日ではない。日曜はキリストの復活の日だから。



● 霊現

「復活」という言葉がまた躓きになる。「また生き返る」のが復活かと思う。そうではない。キリストは「霊現」された。肉体のキリストが霊的な存在として現れたのがキリストの復活です。霊の体がキリストの復活のすがたなんです。今も生きて現れる。我々に霊的に、霊の力をもって臨んでくださる。それはもう、

「主さまー」

と一言叫べば、キリストが入ってきてくださる。もの凄い力を受けるから、ありがたいね。私の祈りは簡単で、「主さま」と言うだけで、あとは言葉がない。「主さま」だけ。「主さまー」と全身で——なにも叫びはしない——沈黙の叫びをすると、力がくる。私は寝るときも、「主さま」と言って寝てしまう。キリストの中に入ってしまう。眠れないということはひとつもない。眠れないのは、あれは神交衰弱という。神との交わりが衰弱している。

「しんこう」というのは「信じ仰ぐ」ではない。完全に上からの現象、現実です。それが本当の現実なんです。こっち側の

「信仰状態が、実存が、行いが、聖書の勉強が」

なんて、そんなことを言っているのではない。

聖書は身体で読む。言葉の背後からグーッと力がくる。

「眼光紙背に徹する」

という言葉がそうなんです。そういう聖書の読み方をしないとね。聖書は意味の世界ではない。現実の世界です。

「聖書を読む」

というのは、

「聖書の現実の中に入る」

ということ。もう我々はそういう所に徹しなければダメですよ、いつまでたつても。だからもう、

「楽で力が来てありがたくてしょうがない」

というだけです。

● 敬天愛人

西郷南洲が、

「敬天愛人」

と言った。さすがは南洲だ。本当に天を敬すれば、人を愛せざるを得なくなる。その結果が、

「愛人」

なんだ。

「敬天」



がなければ、「愛人」はダメなんだ。

福音の交わりというのは非常に楽しい。よく、「クリスチャン」といいながら、人間関係をゴタゴタ言う人がある。

「何がキリスト教か」

と言いたい。本当にキリストを見ていないから、そんなことを言っている。

「誰がどうのこうの」

と、人のうわさをしている言葉は嫌だね。キリストに直結していればそんな言葉は出てこない。そんなのはクリスチャンでも何でもありません。似て非なるものです。横の関係をどうのこうの言うのはダメ。友人とは一対一の関係です。話をするなら、一人称と二人称だけ、三人称はいらない。三人称の話をしたらダメなんだ。その人を本当の意味で推奨し誉めるならいいが、何のかんの言っているのはみなダメです。

あなた方一人ひとりが本ものであってくださいよ。キリストが喜びたまひ、そして、キリストが捕まえている、

「私はお前を離さないぞ」

と。そういう福音の世界に自分が入っている。

「私は逃げようとしたって逃げられません。躓いても転んでも立たされません」

と、はつきり言えなければダメです。躓いても転んでも大丈夫。必ずキリストは立たせてくださる。とにかく、神・キリストとの関係が直結していなければダメなんです。人ごとではない。そうすると、今度は逆に人を助けてやる。知らない人に、

「来たれ、来たりて見よ。我（わがうちなるキリスト）を見よ」

というわけです。本当の権威をもつようになる。

その無の原点がイエス・キリストなんです。だから、無者なんだ。キリスト自身が最大の無者であった。神一切です。我々はキリストの無者である。無者修行をしなければダメなんだ。世界に

「無者キリスト」

なんて言っている人はおそらく無いではないですか。ヨーロッパ人は「有」の世界だから、無の世界を知らない。欧米は有。そんな有は大したことない。インドから始まっている東洋的なものには本当の「無」がある。しかも、福音的な無が本ものなんです。

●活ける文字

旧約ではヨブ記、エレミヤ、第二イザヤ、そこらが凄い。あれは旧約でも、新約と相通ずる世界です。とにかく、聖書は凄い。これは凄い本だ。人間が書いた本ではない。絶対に頭で書いた本ではない。頭で書いたり、仕事をしたものはみな本ものではなくなってしまう。全身でなければダメなんだ。



どうぞ、皆さんも、力が来てしようがない、楽しくてしようがないという、止むに止ま
れずして動いているような、そういうキリストの僕・婢しもべはしためであつてください。

「福音というのは説明なんかできません、これは大変なことです。私を見てくださ
い。私は聖書の活字です、全存在が活ける文字です」

と告白する。あなた方はキリストの光を受けたら、光のように明るくなる。

「汝らは世の光なり」

という。

「我々はキリストの光なり」

という存在です。

中世の神秘家にも闇の中で本当に光を見た人がある。エックハルトなんていうのもそう
いった人間だ。アッシジのフランチェスコも素晴らしい。ダンテも凄い。『レ・ミゼラブル』
を書いたユゴーも凄い。第一級の文学は読みなさいよ。その中には福音がとけているから。
二級、三級のものはいらぬ。私が中学の時に

「すべからず第一級のものを読め」

という漢文の言葉があつた。芸能の世界ではチャップリンだね。あれは凄い。笑わせたり
泣かせたりしているが、あの中に真理が隠れている。彼はもともとユダヤ人です。

今の日本は本当に軽佻浮薄けいちようふはくだね。日本は精神的靈的にダメだ。日本は一番危ない。「オウ
ム」なんてやっているのでは。あれは傲慢の靈だ。政治家が総理大臣から、政治家自身が
本当に聖書を読まなければダメだ。イギリスのグラッドストーンなんかは本当によく聖書
を読んでいた。ビスマルクもそうです。リンカーンもそう。第一級の向こうの政治家はみ
んな聖書をよく読んでいます。日本は聖書をそつちのけにしていたのでは、いつまでたつて
もダメだ。

だから、あなた方一人ひとは伝道者ですよ。

「本当に聖書を読め。こんな面白い本はない。力が来てしようがないぞ。意味の世
界ではない。もの凄い現実だ」

と言って、友人一人ひとりに、これは頼みがいのある友人だという、そういう友だちに勧
めてやりなさい。いい加減な魂はダメだよ。そういう意味で、あなた方一人ひとは男の
方も女の方も伝道者です。キリストの道を伝えなければ、キリストの僕ではない。伝えざ
るを得ない、語らざるを得ないことになる。

「語るを得ないですることが本ものだ」

とヒルティが言っている。それは天的必然です。天的な活ける必然です。人にどう思われ
ようが、そんなことは一向差し支えない。神・キリストとの縦の関係をしっかりと立てて、
お互いにその証し人としていよいよ進んで行きたいと思えます。



● どん底を歩いた人

日本のこの頃のキリスト教界で第一人者は誰だと思う？ 賀川豊彦です。賀川さんは本物です。本当にどん底を歩いた人で、そして本当に、弱い人、悩める人、病める人の友となつて、それを助けていった。賀川さんの伝記や賀川さんの書いたものを読んでごらん下さい。あの『死線を越えて』は素晴らしい本です。私の育つた無教会の内村鑑三以下には、賀川先生に匹敵するひとはいない。私はこの頃、賀川先生は本当に凄い人だと思う。よく勉強もしているし、現実に本当にどん底を歩いたし。なにも無教会の悪口を言うわけではないけれども、内村鑑三、藤井武の伝統は——単に観念ばかりとは言いませんけれども——聖書を研究して、そして壇上からものを言つて、また筆でものを書いている。私の育つたキリスト教はそういうキリスト教だった。賀川さんののは、どん底を歩いて、実践して、人を助けていくような福音の世界です。

「キリスト教」

という言い方が間違つている。

「キリスト道」

なんだ。道なんだ。「我は道なり」という世界だ。

「我は道なり、生命なり、真理なり」（ヨハネ14・6）

という。日本人は道の民なんだ。「教会」なんて言うからいけない。本当は道会なんだ。茶道、弓道、柔道と言うでしょ。みんな道だ。現実存在をもつて証していくところが道なんです。いろいろ研究してものを言うのは教だ。学校の先生もいろいろ研究してそれを拝借してものを言っているようなことではいつまでたつてもダメです。小学校の先生は本当は道師、なければダメなんです、教師ではダメ。学校も本当は道場なんだ、教場ではない。

私の小学校の時の校長さん、それから5、6年の時の担任の先生、これは道に通ずるような人格の方だった。だから、私は何歳になつても非常に昔を懐かしむ。その国語の先生は作文の時に

「体験しないことは書くな、自分が体験したことを書け」

と言つた。私はある夏に温泉で、誰にも教わらないでいろいろ工夫して泳げるようになった。私が泳げるようになったのは温泉なんです。それを夏休みがすんでから書いたら、三重丸をもらったね。

ドイツの大詩人のゲーテも

「自分の書いたものは全部、告白だ」

と言っている。彼が天界に往く二週間前に、

「私が無条件に尊敬し、その前に頭を下げるものがある。それは太陽と、もう一つはキリストだ」

と言つた。さすがはゲーテだ。太陽とキリストの前には無条件に頭を下げるという。そう



いうゲートを普通のゲート研究家が知らない。

ゲートにしろダンテにしろトルストイにしろユゴーにしろ、あの第一級の文豪たちはやはり全部聖書が元になっているから違う、聖書が溶け込んでいるから。我々も聖書が溶け込んでいるような人間にならなければね。

●(詩)「視よこの人ぞ！」

ベートーヴェンなんていうのは耳が聾つんぼになってしまった。耳が聾でありながら、小川のせせらぎや木の葉のすれる音をちゃんと彼は魂で聞いている。だから、ああいう音楽が出てくる。肉の耳では聞こえない。私はベートーヴェンという音楽の大家のその魂が非常に好きだ。

私はベートーヴェンに感激して歌をつくった。

(召団讃歌D2)「視よこの人ぞ！」

(1985年2月28作詞、作曲：Tatsuo Koike)

- | | | | |
|---|---------------------------|-----|----------------------------|
| 1 | ああベートーヴェン！ | 生涯の | 誰か知る |
| | 彼の涙を | | 遂に無し |
| | 「第二の我」は | | 宿なりし |
| 2 | この世は仮りの | | 音の無き |
| | 音はひびけど | | 辿りつつ |
| | 旅路を独り | | 眼にて聴き |
| | 森と小川を | | 奏でたり |
| | 「パストーラル」を | | 孤独なる |
| 3 | 見よ此の人ぞ！ | | 巨匠 <small>きよしやう</small> なり |
| | 音の芸術 <small>たくみ</small> の | | つき貫 <small>ぬ</small> けて |
| | なやみ苦しむ | | 「第九 <small>だいく</small> 」なり |
| | 世に投 <small>な</small> げしは | | その心 |
| 4 | 孤独なれども | | みなぎりて |
| | 力と愛に | | 胸をうつ |
| | あらゆる人の | | かぎりなし |
| | 音曲 <small>しりべ</small> の波は | | |

「パストーラル」とは「田園交響楽」です。私は歌が割合に好きだからね。皆さんとこうやって福音をお互いにしゃべったり聞いたりしていることは楽しいことです。

とにかく、欧米人は有の世界です。ところが、東洋そして日本——日本は全部ではないですよ、日本の心ある人——は無の世界を持っている。無の世界が本ものです。有ではダメなんです、無でなければ。



神・キリストとの縦の線をはつきりと持っている人でなければキリスト者とは言えない。あなた方は、本当にキリストの光で光っているような、そういうキリスト者でいよいよあつていただきたいものです。何と言つても、キリストの直弟子たち、あれはみな本ものです。我々はあのキリストの直弟子たちの本ものの現実に、

「キリスト直結」

で行かなければダメです。今も生きて在りたもうキリスト直結で。

「キリスト教」

ではない。

「キリスト」

です、キリスト直結です。そうすると、横の関係なんかはもう問題でなくなる。横の関係をどうのこうの言っているのは本当のクリスチャンではない。

讚美歌は大いに歌いなさいよ。キリストを讚美することは一番大事なことです。大いにいろいろな讚美歌や聖歌を歌ってください。歌を天に向かって謳うたうことは大変大事なことですから。

● 祈り

祈ります。

主イエス・キリストさま。本日はこの夕べ、主に在るところの、あなたに在るところの兄弟姉妹たちと、聖書を中心にし、聖言みことばを中心にして、また御霊の御導きのもとに、十字架の御贖いの土台の基に、このようにして集会をもたせられ、誠にありがとうございます。私たちにとっては、主さま、あなたが一切です。どうぞ、あなたとのこの縦の関係を本当に実質的に、それを本当に生活の中心として、意識するしないに拘らず、生活の中心としていよいよ歩ませてくださることを切に願ひいたします。

このようにして、この兄弟姉妹たちと共に福音の世界を証しすることができ、御名を讃えたてまつります。感謝いたします。兄弟姉妹たちは一人ひとりが伝道者です。隣人への福音を伝えずんばならずと、それが本当の生活であることを、何をしていても、そのことを本当にしていく証し人として、いよいよお使いくださることを切に願ひたてまつります。

たくさん祈りたきことがあります。この兄弟姉妹たちの全身に溢れるそれと共に、また今日を祈り覚えてくれるところの兄弟姉妹たちと共に、主イエス・キリストの御名にあつて捧げ奉る。アーメン。

